
2万光年彼方の愛の告白

プロク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2万光年彼方の愛の告白

【Nコード】

N4274B

【作者名】

プロク

【あらすじ】

地球から、遙か2万光年離れた宇宙総合大学理論物理科に通う2年生の大木哲也が恋をして告白するが、その結果は。

僕は地球まれ日本育ちの大木哲也男、地球標準年
齢19歳。いま、地球から2万光年離れたペディウス星系第5惑星
ニーンンの宇宙総合大学理論物理科に通う2年生。僕は今恋をして
いる、遙か故郷から離れて1年と少し。そんな僕が恋をしたのは宇
宙生物学科2年生のシャーミンだ。

1年生の始まりに君と廊下ですれ違ったあの時。君のつけていた香
水の匂いに、春の花畑を思い出し振り返ったその時から、恋が芽生
えたのかもしれない。目に映る景色の中に君がいると、ついつい見
てしまう自分に奇妙な感覚を覚えた。いつしか、君の事を視線が追
いかけている自分に気がつき、恋なのだろうかと思いはじめた。

そしてなぜか君も僕を見ている時があり、視線が合ってしまうとお
互いにうつむいてしまう事に気がついたのは、それから少したった
からでした。

あれから1年、僕はとうとう告白する事に決めた。僕の愛しいシャ
ーミン、君の事を想い何度ベットで眠れない夜を過ごしたことだろ
う、目をつぶれば、君の姿が鮮明に見えてくる。君の愛くるしい

瞳、

黄色い目の中にある青い瞳。左右の目が別々の方向を見ているも、
中央の瞳はこちらを常に見ている。愛くるしい緑色の顔、かわい
らし

いとがった耳。特に好きなのは君の尻尾だ、ゆらゆらと何時もゆれ
ている、緊張している時は少し上向き加減にぴんとしている君の尻
尾。嬉しい時はもちろんフリフリと速くゆれる。

僕の愛しいシャーミン、とうとう君を愛がかなう桜の木の下に誘
った。

うつむき加減に返事をするシャーミン。待ちきれずに30分も前に
着く僕、早すぎたかなと思いつつもうろうろしていた僕。遠くか

ら歩いてきた君の姿を見つけて心臓が張り裂けそうになる。僕のそばに来た彼女、恥ずかしげにうつむいている。尻尾はこれ以上ないほどピンと上を向いて固まっていた。

僕は渾身の勇気を振りしぼって話し始めた。

「僕は地球生まれの地球人です」

「そんな僕ですが、シャーミンさんを1年の時から見ていました」

「好きです！ 僕の彼女になってください」

わずか数秒だったが、僕にとっては長い沈黙の時間だった。シャー

ミンは小さな声で話し始めた……

「私も哲也やさんのことが好きです」

「影から何時も哲也さんのことを見ていました」

「こんなに遠く離れた惑星で、同郷の人に会えるとは思いませんでした」

「お父様に言われ、絶対に守っていた秘密を打ち明けます」

そう言って、首の横にあるボタンを押す。小さな電子音と共に顔が二つに割れ、その中から黒髪をした地球人の美少女が現れた。

僕はあまりの驚きと共に、溢れる涙を流して泣いた、うつむきながら僕はつぶやいた。

「まさか…… まさか…… ま・さ・か！」

「シャーミンが…… 同郷の女で、ブスで無様で汚らしい地球人だったとは、僕の恋も愛も失った……」

その言葉を聞いた美少女はわなわなと振るえる手を握り締め。

「哲也ブッコロス

！」

叫んだと共に、哲也に必殺の回しげりをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4274b/>

2万光年彼方の愛の告白

2010年10月9日05時30分発行